70　猿長者

それでは、私たちが小さい時に、お正月の、お爺さんやお父さんたちが、年頭の挨拶参りを兼ねての席でよく聞いた昔話をこれから始めます。

昔あるところに、年取ったお爺さんとお婆さんがおられたようであります。また、その隣にはたいへん金持ちの、先のお爺さんお婆さんというのはごく貧乏のお爺さんお婆さんで、また隣には、たいへん金持ちの家があったようですが、ある年の暮れ、大晦日の日に、この貧乏人の年取ったお爺さんお婆さんは、普通だったら一般的に沖縄では、豚をつぶして年を取るというのが、年を取り、そいて各道具、家内の道具ですね、道具にもニンニクの葉をもって年取りなさいといって、そのニンニクの葉を配って、そして大晦日は一様に年を取ったようでありますが。

この貧乏人のお爺さんお婆さんは、食べる物もなければ何もないということで、お婆さんに、

「隣の家へ行って米俵を借りて来なさい」と言ったもんだから、お婆さんが、

「これを借りてきてどうしますか」とお爺さんに聞いたら、お爺さんは、

「この米俵を借りてきて、これから米粒の一粒でも二粒でも落ちれば、それを炊いて、それで年を取ろうではないか」と言ったもんですから、お婆さんは、

「ああ、そうですか」と言って、隣の家にこの米俵を借りに行ったと。

だがしかし、隣のお金持ちの親父はすぐさま、

「貧乏人に貸す俵はない」ということで、突っ返したようでありますが。そのお婆さんは泣く泣く家に帰って、その状況をお爺さんに一部始終話したら、

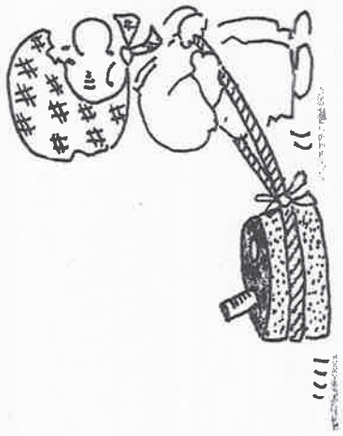
「そうか、それではもうやむを得ないから、火を炊いてでも年を取ろうか」ということで、火を炊いて老夫婦話し合っていたところに、あるところから白髪のお爺さんが現われて、

「なぜこのようにしているか」と言われたら、お爺さんから、

「実はこうこうであります」と、今までのことを一部

始終、この白髪のお爺さんに話したら、
「ああそうか。それでは心配することはないから、早く鍋釜をきれいに磨ぎなさい」と言われたんで、お婆さんがその鍋釜を丁寧に磨いで、したら、すぐたちまち立派な御馳走ができて。
　で、三名御馳走して年を取り、そして翌日、元旦の朝になって、起きるとこの白髪のお爺さんから、
「湯を立てなさい、お風呂を立てなさい」と言われたもんだから、素直に、
「はい」と言って風呂を立てたら、まずお爺さんからそれに入って。そしたら、この貧乏人のお爺さんは、今までもう年取ったお爺さんであるが、風呂上がると同時に、結婚当時の若さの若者に立返り、お婆さんも結婚当時の若い人に返ったと。
　そしたら、この白髪のお爺さんから、
「それでは早く着物を着替えて、隣の金持ちの家へ行って、年頭の挨拶をしてきなさい」と言われて。年頭の挨拶は本土では『おめでとうございます』ですが、沖縄では『よいお正月でございます』という意味のご挨拶をするわけです。そういう年頭の挨拶に行ったら、隣の金持ちのお爺さんが、
「君は誰か」と。あの年寄りがこのように若返ってきたもんだから、見分けがつかずして問い質したら、実はこうこうであったということを一部始終話したら、
「ああ、そうか」と。そして、
「そのお爺さんはまだいるか」と言ったら、
「もう今さっきお立ちになりました」と言って。
　したら、その金持ちのお爺さんは早速馬を立てて、そのお爺さんの後を追って行ったら、道中でこのお爺さんに会って、そして、もう拝み倒して家に連れ戻して。そして、
「是非われわれも若くして下さい」とお願いした。ただ、その白髪のお爺さんは
「そう、いいから早く、じゃあ風呂を立てなさい」と言って、風呂を立てて。そして、主人から入ったら、その主人は終わると同時に、湯から上がると同時に雄猿になって上がってくるし。そして、その奥さんは、女主人は、蝿とりになって帰ってきたと。そして、子どもたちは鼠と。みんななって出てきたと。そしたもんだから、この動物はここにはいれないから、みんな

逃げて行ってしもうた。
　その時に、この白髪のお爺さんの隣のまた、前は年寄りで老夫婦であったが、貧乏人の老夫婦であったが、今はもう若返っておる、若夫婦になっておるその二人を、この金持ちの家に連れてきて。
「こっちにはもう主はいないから、君らでこっちのあれは管理しなさい」と。沖縄の言葉でカグサミという、カグサメルという言葉がある。これは、管理するという意味。
「しなさい」と言われて。それを喜んで受けて、そこの主になって。
「その代わり、世のため人のために尽くしなさいよ」と言われて、
「そうしますから」と言って一生懸命働いて、世のため人のために尽くしていたところ、こっちの元の主人が、猿になった人が、今でいえば午後の三時頃になるといつも庭の、庭石に来て、庭石に座って、
「我が家を返せ。我が家を返せ」と、もう毎日そのようにしてやられて、もうほとほと手を焼いていたところに、いつかまた、元の白髪のお爺さんがみえて、
「どうか、その後の状況は」と言われたもんだから、
「こうこうであります」とお話したら、
「それでは」ということで、
「それでは、その座る石の上に置かれる石を、釜に入れてちゃんと焼いておきなさい」ということで、この石を焼いて。
　そして、お猿さんが来てそこに、石の上に座る時期を見計らって、その焼いた石を置いたら、その猿が来て、そこに座ると同時にすぐ尻を焼かれて。それからお猿の尻が赤くなったというお話と、さらに、世の中には貧乏してもね、嘆いてはいけないと、僻んでもいけないと。また、金持ちになってもね、人を馬鹿にするんではない、奢るんではないと。金持ちも貧乏人も助け合って世の中を渡るもんだよというような教訓があって。いつも昔の年寄りの方々は、われわれの小さい子どもたちにはいつもそういう話を聞かして。そして、われわれもそういう話を聞いて、ああ、そうかなあと真面目にこれを聞いて、今でもうろ覚えではあるがまだまだ覚えて、たまには子どもたちにも、また孫たちにも今現在、実際話しております。



写真米里　　島袋仁米